

教室で学んだフランス語の知識を身体化する授業とは —理論と実践をつなぐ授業を考える—

武内 英公子

TAKEUCHI Ekuko

Université de Kobe

VZC05125?nifty.com

本論考では、教室内で効率的にフランス語を学ぶために、教室を理論と実践をつなぐ場として捕らえ、この教室内でどのような試みが可能であるのかを考察する。アトリエでは、授業でアルマ出版『Moi, je...』を教科書として使いながら、理論と実践をどのようにうまく連動させていけるのか、という問いに対する一つの回答を出すことを試みたが、その具体例についても触れる。ところでここで用いる「効率的」という語は、語学学習のテクニックという狭い意味だけではなく、語学学習の鍵となる学習にかける時間、これは主に教室外での学習にかかわるものだが、その時間を確保するためのモチベーションを含めた広い意味で使っている。

さて鈴木孝夫は『武器としてのことば』の中で外国語学習を自動車の教習所で運転免許を取る過程に例えたが、日本における外国語学習の問題点は「路上教習」のステップが極端に弱いということだろう。言ってみれば、日本の外国語教育は「プログラムについてコメントできるが、実際プログラムが書けないプログラマーを養成するようなもの」とも言えるだろう。文法等の知識はあるのにそれを使いこなせないのは、「路上教習」、つまり身体化・自動化させるためのステップが足りないからなのである。

もちろん外国語学習を成功させるためには、教室外での訓練は不可欠である。教室外の訓練に学習者を導くために、教室内で教師ができることは何なのか。学習者に集中的な学習と継続的な学習を支えるだけのモチベーションを与えること(例えば対象言語が話されている国の文化や社会に関する情報の提供)、より効率的な学習方法の情報を与えること、などが考えられる。言語は、母語の習得にも言えることであるが、一生かけて学ぶものである。つまり「教師も学生と同じ学習者であり

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

続ける」という目線を教師が持ち続けることが重要なのである。情報がめまぐるしく更新されていく現代においては、教師は常に自身の語学力をブラッシュアップし、語学学習方法のみならず様々な情報に関するアンテナを張り続けることが必要なのだ。

さらに「教室内でこそできることは何か」という観点で考えていくと、授業は、その言語を使いこなすためのモーターとなる文法の知識を与える場であると同時に、その知識をよりよく定着させるために実際にインタラクティブに使ってみるといふ身体的訓練をする格好の場であることに気がつく。与えられた知識を実際使ってみるといふ体験自体から学習者が感じる面白さ、あるいは喜びと、五感を通じての学びが知識をより深く定着させる効果は、語学学習にとってより重要な要素になっている。

教師はしばしばその言語、その言語が話されている国の文化についての専門家であり、良かれと言う思いで、自分の学んできた深い知識を授業中学習者に伝えたいものがあるが（それは研究者にとってしばしば強い誘惑となる）、そうすることは、教師の意図とは裏腹に学生のモチベーションを下げる結果となっているのではないだろうか。おそらくそれは、体を動かさずに座って一方的に聞いている学習者がいかに集中力を持続させるのが難しいかということ、教える側が意外と理解していないことに起因すると考えられる。よってここは誘惑を断ち切って、学習者自身に体験させる機会を奪わない配慮が必要になるだろう。

ここで授業内で使用する教材選びの問題が浮上する。「初習の学習者に話させる」ことを主眼においた教科書というのは実はあまりなかったように思う。しかも対象言語を母語としない教師の使い勝手についても考慮された教科書というのは案外なかった。フランスで作られたダイレクト・メソッドを念頭においた外国人向けのフランス語の教科書を使用すると、まず地の文が学習者にとって難しすぎ日本語に訳すことに終始してしまうということもよく起こる。そこでそうした目的を前面に押し出した教科書『Moi, je...』を使ってどのように、モチベーションのアップとその継続につながるような形で、さらに様々な仕掛けや小道具も援用して、学習者に「路上教習」をしてもらえるか、を考えながら、このような授業の可能性について考察してみたい。

教室内での学びについて考察する前に、それに対置される教室外での学びとは何か、について少々押さえておきたい。教室内での学びと教室外での学びは切り離されるべきものではなく相乗効果をもたらすべきものだからだ。

教室外での語学学習については、まずモチベーションの維持に関わるものがあげられるだろう。具体的には学習者のコミュニティ作りに役立つ、Facebook、Twitter、遠隔テレビ会議など、あるいはフランス文化・社会あるいは言葉に関する情報を与える、ブログ、Twitterなどが挙げられる。もちろんこれらのツールは必ずしも語学学習あるいはその効果そのものに結びつくかどうかは言えないが、それはある意味教師側の問題ではない。教室内での学びについてもいえる事であるが、特に大学

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

教育においては、仕掛けを与えることで全員が嬉々として学習に邁進するという状況は考えにくいし、そもそもそうした教育効果は計りにくいもので、即効性は求められないし、後になって学習を再開することもあり得るだろう。

すでにモチベーションが高い学習者が自律的に学習を進めることの出来る教材（この学習方法情報はブログなどで共有することができる）については、WEB教材、podcast、ニュースのストリーミング、音声付辞書などのアプリ、YouTubeなどの動画サイト、などが挙げられるであろう。語学学習教材は質・量ともに飛躍的に向上している。ほぼあらゆることがネット上で学べる時代になった、と同時に常に更新され続ける知識を誰もが学び続ける必要が生じている。こういう時代だからこそ、語学学習に限らず、モチベーションの維持が重要視されているわけであるが、特に語学学習、母国語を含め語学学習とは完結するものではなく、やればやっただけ進化していく分野である。例えば個人的な経験であるが、ブログ更新やツイッターのためにフランスのニュースを毎日聞くことによって、ヒアリング力と語彙力が日々進化するものである。いずれにせよ、そのような外部環境の急激な変化によって、さらに教師としてのブラッシュアップが怠れなくなった、当の教師も常に学び続けることがより重要になったと言える。

では、次に教室をどのように活用できるかについて考えてみよう。教室外の学びに対置させたとき、教室とは、他者を介在させながら、学んで行くことのできる場所であるということができる。いいかえれば学生同士を交渉させることのできる場所である。一方教師側にしてみると、限られた時間の中で、教室外での学びに接続していけるような、自律的な学習の拡張性を可能にするコアな知識や興味、さらには学習方法を提示しなくてはならない場所なのではないだろうか。

こうした身体性は、特に語学学習において、一つの本質的な部分であるにもかかわらず、日本の語学教育の中では大きく軽視されてきた部分ではないだろうか。日本の語学教育という文脈においては、地理的あるいは歴史的理・翻訳市場の大きさ・話すことの技術や快樂に対する軽蔑などが、その原因として考えられる。

こうした文脈の中で、近年コミュニケーション重視の教育が叫ばれたしたのは、「外国語の能力がある」とはどういうことか、についての定義が変化してきたからであろう。近年外国語ができる、というと特にコミュニケーション能力（communicative competence）を指すと思われるが、実は（1）音声・単語・文法的能力を含む文法能力（grammatical competence）（2）1文以上をつなげる能力である談話能力（discourse competence）（3）社会的に「適切」な言語を使う能力である社会言語学的能力（sociolinguistic competence）（4）問題が起こったときに処理する能力である方略的能力（strategic competence）という4つの能力を満遍なく伸ばしてこそ、総合的にコミュニケーション能力がある、と言える状態になる。

パリ第3大学の教育実習においてフランス語の模擬授業を行ったり、パリ市役所主催の外国語講座を受講したりした際に経験したことだが、少なくとも母国語による文法説明だけ黙々と聞いて、黙々と問題集を解く、あるいは母国語に訳すという

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

授業は皆無であり、最初からインタラクティブに、学んでいる言語を使ってみる・使わせてみる、という訓練がメインになっていた。つまり、語学教育は「聞く」「話す」「読む」「書く」という4技能が重要だと単純に言われるが、実際には上に挙げた能力なしにはコミュニケーションはおぼつかないことが理解されるだろう。

ところで実はこうした教える際の身体性というのは、大学の存在意義とも深く関わる部分である。毎年学年度初めに、筆者を含めたフランス語教育関係者が運営しているブログを読んでもらいアンケートを取るのだが、大学での授業がすべてウェブ上で行われるようになる可能性について言及した記事に対しては、多くの学生は、対面的な交流ができるコミュニティの欠如に対する否定的な意見を表明していた。一方、フランス語の授業の意義については、ある学生がトリビアのネタと書いていたが、そうした認識は日本の外国語学習がコミュニケーションを前提に教えられていないという事実から生み出されたものなのだろう。

しかしながら、大学での外国語学習という観点で大学での学びを考えてゆく時、身体性を軸に考えていくと新たな可能性が見えてくる。特に語学学校と比較し、どう違うのかを考えたときに、よく言われる「大学は自分で勉強するところだから」というのは半分見当違いであることがわかる。むしろ大学は「自分で学習することを支援する様々なリソースやヒントや方法論が集積しているところ」と考えるべきであり、もしすべての学問が自分一人で学べるというのなら、シグナリング目的以外で大学に来るのは時間の無駄ということになってしまう。しかしながら実はこのリソースの有無、先生たちの知識や教える際の方法論の集積が外国語学校とは見逃せない差を生み出すのではないだろうか。語学学校に比べて、あえて「高尚」であることを前面に押し出さなくても、「プロダクト志向」や「フィールドワーク型の学び」といった仕掛けを与えられるだけの物的・知的リソースが体系的に蓄積されていること、しかも民間に比べ低コストであることがもっと評価されてもいいのではないだろうか。例えば図書館のネットワークなどのインフラは、もっとクローズアップされてもいいだろう。

結局のところ語学学校はもともとモチベーションがある人が、高い授業料を払っている効果が大いなのであり、インフラそのもの、方法論そのもの、効果そのものがすぐれているのか、ということは、少なくとも検証されていない。よって大学でのクラシックな外国語学習の最大の特徴であった身体性の欠如という点を改善すれば、大学の外国語学習はより良いものになるはずなのだ。

外国語学習に際し、しばしば *Older is faster, younger is better.* と言われるが、これは「大人のほうが、自分の持っている認知能力を使って短期的にすばやく学習することができる。ところが、何年も経つてくると、若いときに始めた人のほうが、より母語話者に近い外国語を身につけるようになる」ということをあらわした言葉である。これは、大人が文法的な理解において、母国語の知識を活用することによって、説明する能力が高いということであり、子どもの場合は素直に真似をしたり、繰り返してみたり、大人あるいは友達から発音や文法を直してもらいやすいからだ

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

ろうと思われる。とすれば、学習者が大人であることのメリットを生かしつつ、そのデメリットを補うためには、言葉の持つ理屈では割り切れない部分を含め、反射的・身体的な反復訓練がより不可欠になるということであろう。

よく週1の授業では無理であるとか、このクラスサイズではそのような授業は不可能だ、と言われるが、そのような問題ではなく、語学学習に臨む（学生・教師含む）日本人の態度と方法論が今問い直されているのではないだろうか。「大量のインプットと少量のアウトプット」が語学上達の肝といわれるが、外部化できることは外部化し、教室内でのみできることを、フルに体を使わせることによって、そうした反復訓練は可能になる。

これらの理論面を踏まえ、「路上教習」＝学生同士の協働的な学びに学生を誘うためには、いろいろと仕掛け作りをすることが重要になってくる。いろいろ考えられると思うが、具体例としては、まず年度初めにアンケートを取り、クラス全体の雰囲気をつかむようにしている。これは、海外に住んでいた学生もいれば、全く外国にイメージを持ってない、あるいは外国語に苦手意識を持つ学生もいるので、ペア作業をする際や、クラス全体を盛り上げて行くために、大いに参考になる情報である。次に、クラスの雰囲気作りである。初回に綴りと発音の関係をやる際、発音練習をしてもらう時点では、初習外国語に対する期待があるせいか、毎年総じて良い雰囲気なので、それを継続させるために、次回から男女隣に座ってもらう、あるいは出来る学生と出来ない学生を隣り合わせで座ってもらうなど、また様子を見て席替えする等の工夫をしている。綴りと発音の関係は忘れやすいので、特に繰り返しの必要な局面であろう。練習問題においては、一人で黙々と解かせるのではなく、周囲の学生と教えあったり、教師に質問しやすい環境づくりをしている。ペアで協力し、できるだけ多くの文を書かせ、実際に声に出し発音を確認し、文字を見なくても会話が成立するよう誘導している。そのための小道具として、マイクやビデオ撮影といった仕掛けを適宜使いクラスを盛り上げている。必ずしもCALL教室である必要はないと思うが、二人ペアで座ってもらえる形体上の便利さと、必要に応じてビデオ、ネット、音声確認ソフトが使えるという拡張性の高さがあるので、普通教室に比べ格段に使い心地も学生の反応も良いように思う。

最後に。今大学で外国語を教えることの意味とは何なのだろうか。

社会環境のドラスティックな変化によって、外国語習得に求められる能力はドラスティックに変わり、翻訳でなく対面や情報取得のインターフェイスとして使う時代になった。そのことは教師に求められる能力も変化させる。学習方法の伝達も高度化し、さらに激化する競争社会の中で要求される語学のレベル自体が上がっている状況において、語学教育の内容の見直しと、それに伴う語学担当教員の専門教育が改めて必要な時代になっているのではないか。